

# フットサルシューズとサッカースパイクの使用・選択と

## メーカーに対するイメージの比較に関する研究

スポーツコミュニケーションゼミナール 1314051 保土田愛美

### 1. 研究動機・研究目的

矢野経済研究所(2017)の研究から、年々スポーツシューズ国内市場は上昇傾向にあるといえる。さらに、村松(2014)は、「消費者が、どのような基準でランニングシューズを選び購買するのか」という問題を明らかにすることは、スポーツ用品を製造・販売している企業にとって重要な課題である。スポーツ用品のみならず、商品やサービスを販売している企業にとって、消費者がどのような基準で商品やサービスを選び購買しているのかという問題は、非常に重要な課題であり、これまでも様々な視点からの研究がなされている」と指摘している。これらから、シューズの購買行動が競技力にも大きく関係しているのではないかと考えた。

本研究の目的は、フットサルシューズとサッカースパイクの選択と購入、メーカーに対するイメージの傾向を明らかにすることで、フットサル競技者とサッカー競技者にとってより良いシューズ選択をしてもらうことを目的とする。さらに、今後の大学フットサル・サッカー界のスポーツ用品市場の発展に繋がるアプローチをすることで大学におけるフットサル競技とサッカー競技の競技力の向上と発展を目的に行う。

### 2. 研究方法

【調査対象】 J大学のフットサル部(26名)、男子蹴球部(84名)

【調査期間】 2017年7月28日(フットサル部)

2017年9月19日、10月5日(男子蹴球部)

【調査方法】 質問紙調査を直接配布・回収した。

【調査内容】 鳥居・中道(1989)ランニングシューズの選択・使用に関する調査、ランナー世論調査2016を参考に、5つの項目を設定し、調査より得られた結果についてIBN SPSS statistics 24を用いて単純集計を行った。

### 3. 主な結果と考察

シューズ・スパイクを選ぶ基準として「フィット感」は1番重要視され、トレーニング用では「価格」や「耐久性」が大きく重視されるが、試合用では「デザイン」や「機能性」を重視していることが明らかになった。購入場所は、「スポーツ小売店」が1番多く、次いで「インターネット購入」が多いことがわかった。購入方法と試履きの関係については、初めて履くシューズや・スパイクは試履きのできるスポーツ小売店で購入することが多く、

履いていたものと同じものを購入する場合はスポーツ小売店よりも安いインターネットで購入しているようだ。シューズ・スパイクの使用メーカーについては、フットサルシューズは「アシックス」、「デスポルチ」、「ナイキ」の順に多く、サッカースパイクは「ミズノ」、「ナイキ」、「アディダス」の順であった。フットサルシューズで「アシックス」を使用している競技者が多いのは、「フィット感が良い」「安定感」「足裏のボール感覚が良い」などといった印象があり、高いパフォーマンスができるシューズが選ばれているためだと考えられる。サッカースパイク 1 番多く使用されていた「ミズノ」は、フットサルシューズよりもサッカースパイクで専門性を大きく感じていると考えられる。

#### 4. 結論

フットサル部、男子蹴球部は共に「フィット感」、「価格」を基準として選択しており、それほど違いは見られなかった。また、トレーニング用と試合用でも選択基準にそれほど違いは見られず、「見た目のデザイン」の重要性が大きく感じられた。シューズ・スパイクを選ぶ基準は競技性の違いに関連性はなかった。しかし、使用しているシューズ・スパイクのメーカーやイメージは、フットサルとサッカーで大きな違いが見られ、その要因の 1 つとしてフットサル専門ブランドの存在があるといえる。メーカーイメージに関しては、海外メーカーである「ナイキ」、「アディダス」のイメージの得点は高い結果が出たが、日本国内メーカーである「アシックス」、「ミズノ」を使用している競技者が多いため、メーカーイメージと購買要因に必ずしも関連性があるとはいえない。そのため、メーカーはイメージと実際に競技者が購入するシューズ・スパイクのギャップを埋め、さらに専門性を高めていく必要がある。

今後の課題として、他大学や女性の競技者も調査対象者に加えることによって、より信憑性が高く、幅広い研究結果が得られると考えられる。また、メーカーのイメージについて、使用していない他メーカーのイメージまで細かく調査することで、各メーカーにとって新たに見直すべき点や、今後のシューズ・スパイクの発展に繋げていくことができる情報を生み出せるのではないか。そしてまた、トレーニング用と試合用で競技者がなぜシューズ・スパイクを区別しているかさらに突き詰めていく必要がある。大学フットサル・サッカー競技者が今後より良いパフォーマンスが行える環境づくりをさらに行っていくことは、今後重要な課題であるといえるだろう。

#### 5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文の作成にあたり、また、多大なるご指導とご指摘をいただきました、指導教官の伊藤真紀先生に深く感謝いたします。また、お忙しい中、アンケート調査に協力してくださった男子蹴球部とフットサル部の皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。ご協力ありがとうございました。